第３３話　藤原氏の専横

けれども、地方の勃興などには藤原氏は頓着しなかった。　やっと天慶の乱が鎮まって世の中が穏やかになると、彼らはすぐまた驕りに耽って遊び暮らした。御堂関白道長に至って、このわがままは其の絶頂に達した。

藤原氏の栄華

藤原氏の驕奢

将門と**純友**とが東と西とで一度に謀反を起こしたときには、さすがにのんきな藤原氏の公卿達も大いに驚き、一時は大あわてにあわて騒いだが、それらの乱が、― 地方の武士の力をかりてではあったが、

― やっと鎮定すると、自分達が政治を誤まったために起ったのだという事などは少しも考えずに、彼らはすぐまた元にかえって驕りに耽ったのです。

春は花、秋は月、紅葉に、雪に、何かといえば遊ぶことのみを考えて、詩を作ったり、歌を詠んだりはまだいいのですが、綺麗な車を走らせたり、或いはきらびやかな船を浮かべたりして、そこでもここでも宴を開いて歌舞音曲を楽しむという風でしたから、政治はますます紊れるばかりでありました。

天暦の治

ただ次の第 62 代**村上天皇**の御治世だけは、**天皇**が御父**醍醐天皇**に極めてよく似られて御賢明であった上に、御位に即かれたのが既に 21 歳の時でしたので、其の四年後に**忠平**が薨じてからは、関白をもおかずに、御自分で政治をされ、御父天皇の御代に劣らぬようにと、特に文化の進歩を計られたので、世の中もよく治まり、世に天暦の治といって、延喜の治と並べて聖代と称しました。

けれども、或る時、**天皇**が賤吏の年取った者を召されて、「今の時代と延喜の時代とでどちらがよいと思うか？」とお尋ねになると、其の老吏は再三お答えを御辞退申した末に、「愚かな私どもには何事も分かりはいたしませんが、ただ延喜の御代にくらべて、主殿寮から奉る松明が多く、率分堂の前に草の生えているのが変わっているようにぞんじます」と謹んで申し上げたという話が伝えられているのを見ますと、**醍醐天皇**の御代には遠く及ばなかったことが分かります。

これは、松明を多く奉るというのは、政治上の事務が忙しいために夜に入ることが多いということです。率分堂は諸国の年貢を納める所ですから、其の前に草が生えるというのは、年貢が上がらずに、庫の内は空であるということであります。　即ち、収入が少なくて支出が多くなったという意味なのです。

按うに藤原氏が我ままを働いたために、**村上天皇**がいかにお政治につとめられても元のようにはなりかねたのだったのでしょう。

天皇が在位 21 年でお崩れになると、皇太子が立って第 63 代**冷泉天皇**となられたが、**冷泉天皇**は御病気のために政治をなさる事が出来なかったので、**忠平**の長子の**実頼**が関白となりました。

此の時から凡そ百年、第 71 代**後三条天皇**が御位に即かれるまでの間は、全く藤原氏が天下の政治を自分達の一家に都合の良いように行った時代でありまして、朝廷の御威勢は大いに衰え、藤原氏以外の者は見る影もなく抑えつけられました。

一族の間で勢力を争う

さて斯うして摂政、関白を始め、朝廷の高位高官は悉く藤原氏の一族の者でなければ任ぜられないという有様となり、他に全く恐るべき競争相手がいなくなってしまうと、今度は一族の間で摂政、関白の位を争い合って、醜い内輪喧嘩を始めた。　或いは兄弟で争い、或いは叔姪（おじ・めい）で争ったが、それとても、もとより天下の政治をよくして民の幸福を計ろうとするためではなくて、ただ自分一箇の威勢を張らんがためでありました。

- 藤原忠平
  - 実頼 ― 頼忠
  - 師輔
    - 伊尹
      - 道隆 ― 伊周
    - 兼通
      - 道兼
        - 頼道
        - 教道
        - 彰子（一條天皇の皇后、後一條天皇・後朱雀天皇の御母）
        - 研子（三條天皇の皇后）
        - 威子（後一條天皇の皇后）
        - 嬉子（後朱雀天皇東宮時の妃、後冷泉天皇の御母）
    - 兼家
      - 道長

兄弟喧嘩

今其の一例を挙げます。

第 64 代**円融天皇**の御代に、摂政の**実頼**が薨じて、甥の**伊尹**が其の跡を承けたが、間もなく彼も薨じました。　**伊尹**の弟の**兼通**と**兼家**とは、前々から仲が悪くて互いに官位を争っていましたが、其の頃、兄の**兼通**はまだ中納言であるのに、弟の**兼家**は大納言で、其の上、**天皇**のご信任も厚かったことから、関白には弟ではあるが**兼家**が任ぜられることとなった。

ところが、兄の**兼通**は、いつか斯ういう時の用意にもと思い、**天皇**の御母は自分の妹に当たっていたので、かねて其の御在任中に、「関白の職は、たとえ官位に高い低いはあっても、必ず兄弟の順になさしめられるように」という書付を貰って大事にしていたのを、此の時、にわかに参内して**天皇**に奉りました。

円融天皇はおかくれになった母君の御手蹟をご覧になると、先づ懐かしさに、しばし物をも仰せられずに涙にくれておいでになったが、御孝心が深くましましたので、その御遺言に従って兄の**兼通**を関白になされた。　これは弟の**兼家**の喜ばないところですから、其の後はいよいよ兄弟の仲が悪くなり、まるで犬と猿のように絶えず争い合っていました。

そのうちに五年の月日が経ちました。　**兼通**は重い病気に罹って、今度は迚も癒るまいということになった時に、或る日、門前に前駆の士が人を払う声が聞こえたので、誰が訪ねて来たのかと見させると、**兼家**の車が向こうに見える。　**兼通**は、「さては**兼家**、日頃は仲が悪くとも、さすがに兄弟である。　今、自分の大病を聞いて見舞いに来てくれたのか」と、急いでそこらを取り片付けさせて、さて参ったならば関白の職も譲り、後々の事も頼もうと待っていますと、**兼家**の車は、案外にも、**兼通**の邸の前を通り過ぎて、内裏をさして行ってしまった。

兼通はこれを聞くと、眼を瞋らして急に起き上がり、急いで車の用意をさせて、人々の止めるのも聴かずに、冠、装束を整えて参内した。　この時、**兼家**は既に**天皇**の御前近くに参っていたが、思いもよらぬ**兼通**の参内に驚いて、あわてて御前を退くと、**兼通**は御前に進んで、最後の任命をするために

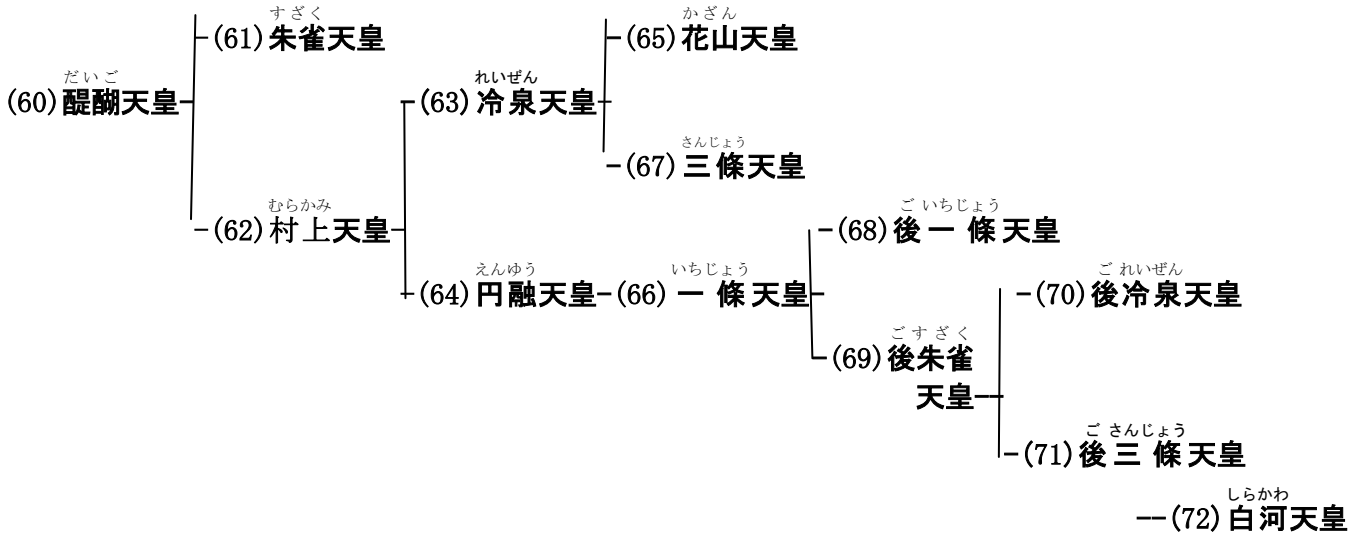
参内した由を申し上げて、さて**兼家**を右近衛大将から治部卿に貶し、従弟の左大臣**頼忠**を関白としました。

此の時、**兼通**は、**兼家**をもっとひどい目にあわせてやりたいと思ったのですが、自分が憎いと思う外には別段の罪もないのですから、そうする訳にいかなかったのだといわれています。　**兼通**はそれから一月も経たないうちに、ついに薨じました。

甥が叔父を呪う

しかし、第 65 代**花山天皇**の次に、**兼家**の娘のお生み申した**円融天皇**の御子が御位に即かれて、第 66 代**一条天皇**となられると、**兼家**は**頼忠**に代わって摂政となりました。　実に**伊尹**が薨じた時から十五年目で彼の時代が来たのです。　やがて彼が薨じて長子の**道隆**が関白となると、弟の**道兼**は不平を起こして、様々な不作法な行いなどしていましたが、其のうちに**道隆**が薨じて、**道兼**も望みの如く関白になることが出来ました。

ところが、今度は**道隆**の子の**伊周**がこれを怨んで、人をして**道兼**を呪わせた。　其のせいでもなかったでしょうが、**道兼**は関白の職に在ること僅か七日で薨じたので、世に七日関白といわれた。　**道兼**の薨去で、**伊周**は今度こそは自分が関白になれることと思っていますと、意外にも、**道兼**の弟の**道長**がそれに任ぜられたので、彼は大いに憤って、伯父の**道長**を怨んだばかりか、朝廷をも怨み奉って、しきりに乱暴な事などをしました。



こうして数十年の間にますます激しくなって来ている藤原氏の争いも、ついに落ちつく時は来ました。藤原氏の栄華の絶頂に立った**道長**が、其の最後の勝利を占めて、一門の人々をすら全く圧倒しつくしてしまったからであります。

藤原道長

藤原道長は**忠平**の曾孫に当たり、**兼家**の子です。　兄の**道隆**、**道兼**がつづいて早く亡くなったので、其の後をついで関白になった。

幼少の時から人にすぐれて気性が強く、学問にも長じて、詩や歌などをも上手に作った。　其の頃の貴族の多くは臆病で意気地がなかった中で、彼が独り抽んでて豪胆であった事に就いては、次の話が伝えられています。

或る五月雨の夥しく降って物凄い真夜中に、清涼殿の殿上の間でいろいろと恐ろしい物語などをしたあとで、兄の**道隆**や**道兼**でさえ、**天皇**のご指定になったそれぞれの御殿へ行けずに青くなって途中から引き返した時に、彼は一人で真っ暗闇の雨の中を遥かに離れた大極殿まで行って、高御位の前の柱の下を少し削って、その木屑を証拠に持って帰ったとそうです。

道長は、第66代**一條天皇**の御代に右大臣を経て左大臣となり、長女の**彰子**が**一條天皇**の皇后となってからは、いよいよ其の勢力が盛んになりました。

三條天皇のご不満

一條天皇の次に**花山天皇**の御弟がお立ちになって、第67代**三條天皇**となられると、**道長**はまた第二女の**研子**を皇后に進め奉りました。　**三條天皇**は常に藤原氏の我がままを憎んでおられたので、どうかしてこれを抑えようとなされて見たが、**道長**の勢いは既に非常に強く、天皇のお力を以ってしても如何ともなさることが出来なかったので、大いにご不満におぼしめされ、それがもとで御眼を悪くなされたために、在位僅かに五年で、ついに御心ならずも位をお譲りになりました。

其の時、宮中の月はもはや御見納めであるので、後々までも御思いでの種となろうとおぼしめして、

心にも　あらでうき世に　ながらえば　　こいしかるべき　夜はの月かな

と詠まれて、深い御感慨をお漏らしになっています。

道長の慢心

次に**一條天皇**の御子がお立ちになって、第68代**後一條天皇**となられたが、御母は**道長**の娘の**彰子**で、僅かに九才のご即位でしたから、**道長**が摂政となりました。　其の翌年、彼は摂政を子の**頼道**に譲って自分は太政大臣となり、また其の翌年、太政大臣も罷めて隠居することとなったが、其の年、第三女の**威子**を**後一條天皇**の皇后に進め奉りました。

実に三人の娘が相ついで三代の皇后に立ったのですから、彼の得意は想像するに難くありません。　其の時、**道長**は喜びのあまりに歌を詠んで、

この世をば　わが世とぞ思う　望月の　　欠けたることも　無しと思えば

と言った。　何もかも望み通りに皆かなって、まるで十五夜の満月の欠けたことのないのと同じであり、此の世は自分の世のように思われる、というのですから、いかに思い上がっていたかが分かります。

これを前の**三條天皇**の、「心にも無く、つらい憂き世に生きながらえていれば」と仰せられた御心と比べると、何という世の有様であったろうと、思わず涙が出ます。

道長の栄華

なお其の上に、**道長**の第四女の**嬉子**は、其の後また、**後一條天皇**の御同母弟で、後に第69代**後朱雀天皇**となられた**敦良親王**がまだ皇太弟でおられた時に、妃にあがって、**親仁親王**をお生み申した。親王は後に立って第70代**後冷泉天皇**となられました。

かくして、実に**道長**は、**一條**、**三條**、**後一條**の三天皇の御代にわたって三十余年の間、朝廷に在って勢いを振るい、其の娘は四人まで宮中に入り、其の外孫に当たらせ給う皇子は三人まで引きつづいて御位に即かれたのであります。　其の勢いの盛んなことは、曾て藤原氏にも其の例のなかった事で、況して朝臣の誰といって彼に頭の上がる者などある筈がありませんでした。

荘園の私有

其の上、彼は数多の荘園を有して、皇室よりも遥かに富んでいたので、思うままに驕りを極めて、其の栄華の点でも天下を驚かしたことがいろいろと伝えられている。

ここに荘園というのは、もとは別荘、園地のことでしたが、後には新たに開墾した土地などをも此の名で呼びました。　荘園は朝廷から特に私有を許されていたので、藤原氏をはじめ有力な者は此の名義の下に多くの土地を占めて、国司の支配を受けず、租税をも納めずに、ほしいままに天下の富を私したのです。

中でも藤原氏は其の勢いに任せて、無限に多くの荘園を私有していたので、ついには其の富が皇室をも凌ぐようになったのです。

法成寺の建立

道長のわがままは、其の隠居する時に建てた法成寺という寺の工事に於いて最も甚だしかった。彼は54歳の時に、髪を剃って坊さんとなり、法成寺を京都に建てることにしたが、此の寺は奈良の東大寺にも劣らないほどの大きな寺でしたから、従って其の工事には莫大な費用がかかった。

道長は国家のお金をどしどしそれに使った上に、諸国に命じて、珍しい材木や大きな石などを集めさせたり、また、公卿らに命じて、宮中や諸官省の庭などにある石を取って建築場に運ばせたりした。

ところが、工事の出来上がらないうちに、たまたま**道長**が病気に罹ると、子の**頼道**は関白の名を以って令を下して言いました。　「朝廷の事はあとまわしにしてもよいから、法成寺の御用は怠るな」と。

何という驕慢の極みであったでしょう。　昔、**蘇我入鹿**が無道を極めて、不臣の行いをしたのといくらも違わないのでありますが、当時は誰一人としてこれを咎める者もいませんでした。　いや、あっても、これを言い出すことが出来なかったのでしょう。　実にそれほどまでにも藤原氏の勢いが天下を圧倒していたのです。

御堂関白

それでそれからは、公卿らはいよいよ競って毎日数多の工夫を出だし、国々の役人は朝廷にたてまつるものをさしおいて先づ此の寺の材木や瓦などを差し出したので、工事も殊の外に捗取って、割合に早く出来上がりました。

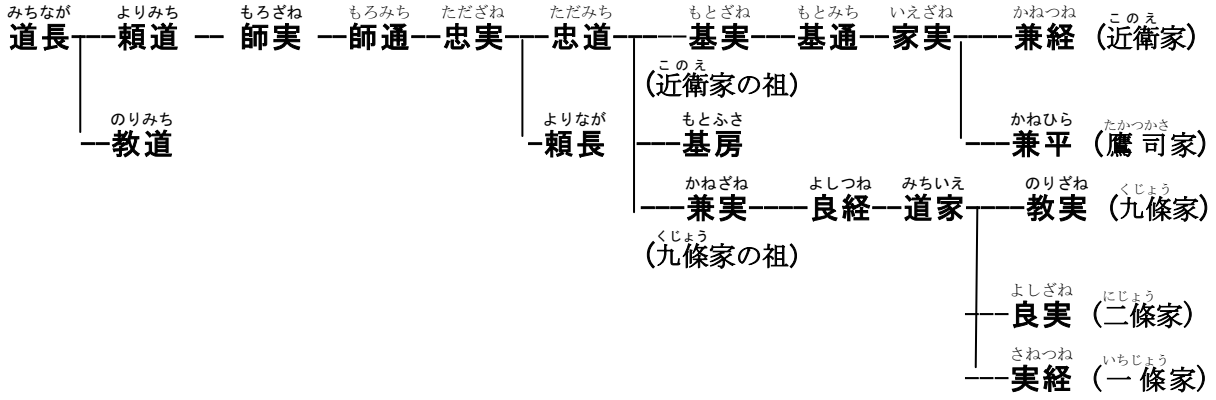
道長はここに移って住みましたが、此の寺のことをまた御堂ともいったので、世間では道長の事を御堂殿といい、また、御堂関白とも呼びました。　彼は実際には関白となったことはなかったのですが、摂政となり太政大臣となって、関白と同じように、政治を欲しいままにしていたからです。　数年の後、**道長**はここで 62 歳で薨じました。

道長は、斯うして栄華を極め、其の勢いの盛んなことは世にならぶものもいなかったのですが、しかし、彼の事績として後の世に伝えられている事は何もありません。　折角天下の富をつくして造った法成寺も、其の後間もなく火災にかかって、跡方も無く焼け失せてしまいました。

五摂家

さて、藤原氏は**鎌足**以来すでに四百年、其の一門は皇室と共に大いに栄えて来たので、今は非常に多くの家に分かれていたが、斯うして**道長**が独り久しく絶大の勢いをふるったために、此の後は彼の一家のみが最も栄えて、摂政や関白には、特に此の子孫に限って任ぜられることになりました。

後に其の家が分かれて近衛、鷹司、九條、二條、一條の五家となりましたから、これを五摂家といいました。



（第 33 話　藤原氏の専横　終わり。　　次は一旦前頁に戻り、　第 34 話　**平安時代の学芸美術**　へ）